探究的な学習の在り方に関する研究推進地域

連携中学校区：北広島町立芸北中学校区

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
北広島町立芸北中学校	4	33名
北広島町立芸北小学校	7	52名

(R5.12.1現在)

1　研究の概要

（1）研究テーマ及び研究のねらい

① 研究テーマ

児童生徒自らが探究する
生活科・総合的な学習の時間の創造
～ルーブリックをもとにした
単元のブラッシュアップと評価を通して～

② 研究のねらい

作成したルーブリックをもとに単元のブラッシュアップを行い、実践と評価を繰り返すことで、自ら探究し、ねらいとする資質・能力を身に付ける児童生徒を育成する。

（2）資質・能力の設定について

評価を簡略化するため、身に付けさせたい資質・能力を以下のように整理している。

学習指導要領が示す育成すべき資質･能力の３つの柱	芸北小中学校が児童生徒に身に付けさせたい資質･能力
知識及び技能	協働する力 安全・安心をつくる力
思考力、判断力、表現力等	課題解決力 多面的･多角的な見方･考え方
学びに向かう力、人間性等	意志力 自己回復力

（3）取組について

① 芸北小中学校「学びのスタイル」の統一

えがく・・・今の自分を見つめ、活動を通して「めざす自分」とその理由、予想される「妨げ」とそれを乗り越えるための「作戦」を考える。

やってみる・・・「めざす自分」になるためにチャレンジする。

ふり返る・・・「めざす自分」になる（近づく）ことができたかをふり返り、その理由（原因）を考えて次の活動に生かす。

② 学びのスタイルに沿ったワークシートの活用

③ 単元のブラッシュアップ（芸北小中学校全学年の主な単元）

○ 失敗から学ばせる工夫
- 「妨げ」（少し頑張れば乗り越えられる心の負荷）を、２回目、３回目と徐々に大きくする。
- 試しの体験（１回目）は敢えて失敗させることで、児童生徒のやる気に火をつける。

○ 地域の人材活用
- その道のプロをゲストティーチャーとして迎える。
- 児童生徒の方から、必要な時にゲストティーチャーに相談できる環境を整える。

○ 自己を見つめさせるふり返り

④ ルーブリック評価

○ 昨年度作成したルーブリックを用いて評価

○ 評価結果をもとに、単元計画とルーブリックを改善

2　実践事例　―自己を見つめさせるふり返り―

「学びのスタイル」の中の「ふり返る」で、自分の「課題」や「妨げ」をメタ認知させることが、次の活動での主体的な学びにつながると考えて取り組んだ。

（1）「やってみる」の活動に参加する職員が共通認識をもち、記録を残す。

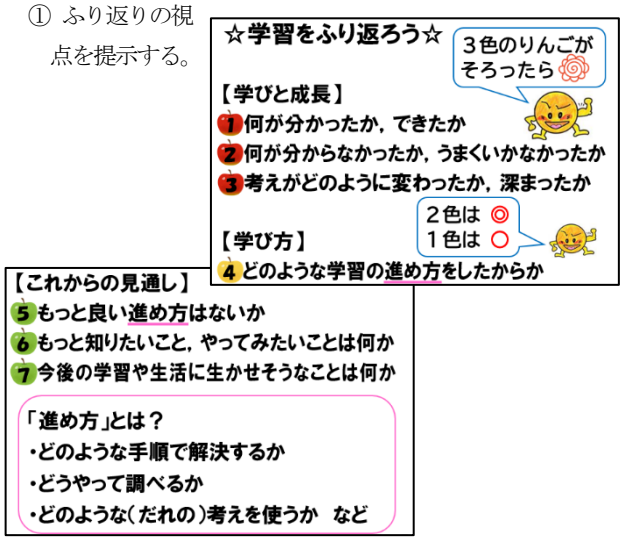
活動前　評価の視点を共有する。

活動中　評価の視点に沿って写真を撮ったり、行動や発言をメモしたりする。（課題となる場面を中心に）

活動後　その日のうちに、児童生徒それぞれの良かった点や課題を共有する。

（2）ふり返りの書き方を指導する。（小学校）

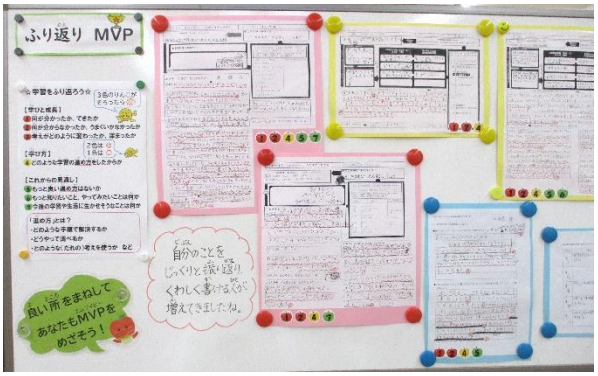
① ふり返りの視点を提示する。



② ３つの項目から自分で視点を１つずつ選んで書けることをめざす。

③ 児童生徒が書いたふり返りを職員間で交流する場をもち、指導の工夫等について学び合う。

④ 各学年の手本となるふり返りを廊下に掲示する。



（３）活動後すぐにふり返りを書かせる。

記憶が鮮明なうちに「くやしい」「もっとこうすれば…」等のあふれる思いを書かせる。

（４）「ふり返る」の授業において、話し合いをファシリテートする。

① （１）と（３）をもとに、児童生徒に気付かせたい課題や、学級全体で深めさせたい課題等を絞る。

② 誰のふり返りを全体共有するか考えたり、提示する写真や客観的な意見等を選んだりする。

※客観的な意見とは、職員、ゲストティーチャー、保護者サポーターと連携したことや、他の児童生徒の意見、参加者アンケートの記述内容等をさす。

③ 発問や板書等を考え、授業を組み立てる。

④ 児童生徒の発言をつなぎ、ふり返りを深めさせる。

（５）「課題」と「妨げ」を区別して指導する。

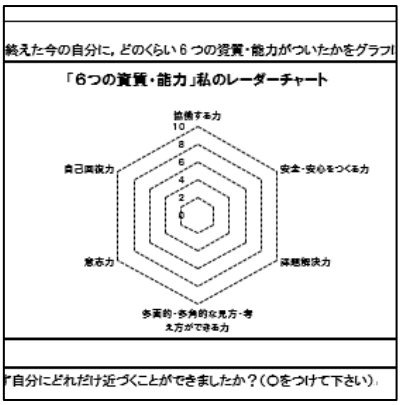
推進協議会で授業研究を行う中で、「課題」と「妨げ」が混乱している現状がある事が明らかになったので、次のように整理した。

課題…「質問できない」「教えられない」等、児童生徒の行動となって表れる事象。

妨げ…「恥ずかしい」「自信がない」等、「めざす自分」の姿に近づけない原因となる気持ち。

（６）レーダーチャートでふり返らせる。（中学校）

単元の初めと終わりに書き込んだ自分の資質・能力の数値を比較することで、目指す自分の姿にどのくらい近づけたか確認しやすくする。



３　研究の成果と課題等

（１）成果

○ 単元をブラッシュアップしたり、自己を見つめさせるふり返りを充実させたりすることで、児童生徒が主体的に学ぶ姿が多く見られるようになった。（「えがく」学習において、課題意識や必要感をもって学習に取り組もうとしている児童生徒94%、ふり返ったことを次に生かそうとしている児童生徒90%）

○ ブラッシュアップした単元において、ねらいとする資質・能力を身に付けている児童生徒は89%であった。

○ 単元の見通しをもたせたり、学びのサイクルを繰り返したりすることで、児童生徒が学習後に達成感をもつことができた。

○ 身に付けさせたい資質・能力を意識して指導することで、児童生徒が生活科・総合的な学習の時間以外でも資質・能力を意識するようになった。

○ 小中の職員がお互いの授業を参観し合うことで、児童生徒の９年間の成長をイメージすることができた。

○ ルーブリックを作成したことで、児童生徒のゴールの姿を見据えて指導することができた。また、児童生徒の成長を見取り易くなった。

（２）課題

○ 児童生徒の思いを丁寧に引き出しながら学習を進めることで、授業時数が計画より多くなってしまった。

○ 「めざす自分」をイメージすることや、自分の課題をメタ認知することが難しい児童生徒がいる。

（３）今後の改善方策等

○ 新しく担任になった人でも見通しをもって指導することができるように、単元計画を具体的で分かりやすいものにする。また、教科横断的に効率よく指導する。

○ お互いの授業を見合ったり、研修を行ったりして、職員のファシリテーションスキルを伸ばす。また、児童生徒それぞれの実態や成長過程に応じて支援の方法を工夫していく。

○ 活用・評価しやすいルーブリックにするために、今後も改善する必要がある。

○ 小学校での学びを中学校につなげるために、小学校の生活・総合ファイルを中学校に引き継ぐ。